

父の乳

父の乳

獅子文六

新潮社

父の乳

昭和四十三年一月二十五日 発行
昭和四十三年八月十五日 四刷

定価 六〇〇円

著者 獅子文六

発行者 佐藤亮一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
電話 東京(廻)一一一
振替 東京 八〇八番

印刷・塚田印刷株式会社
製本・新宿 加藤製本所



© Bunroku Shishi Printed in Japan

(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

父
の
乳

息子におくる

その時、私は、日本橋の叔母の家へ、遊びに行っていた。

叔母の良人は、医師であり、医院は、賑やかな下町にあって、その家へ遊びに行くのは、私の大きな愉しみだった。横浜の私の家は、父の経営する商店と、住宅が、別になっていたので、店の方は賑やかであっても、家の方はそれほどでなかった。そして、場所も、丘陵区域の住宅地にあって、夜なぞは、まっ暗になり、梟の声が聞えた。しかし、叔母の家は、すべて反対だった。それに、医院というのは、人の出入りが多く、家に住む人の数も多く、薬局生の青年なぞは、よく、リモナーデをつくって、私を喜ばしてくれた。

その上に、叔母の家の一粒種の男の子が、私と同年だった。正治という名だったが、ハルちゃんと呼んでいた。私の家は親類が多かったので、従兄弟も大勢いたが、その中でも、ハルちゃんが、最も親しかった。ハルちゃんは、私とちがって、学校もよくでき、性質も、温良で、暁星小

学校の優等生だった。両親も、周囲も、「よい子」として扱うので、当人も、その意識が強く、小さいスマシ屋のところがあった。私の方は、我儘で、札つきの乱暴者だったが、不思議と、気が合った。私も、ハルちゃんに対しては、腕力なぞふるったことはなかった。それなのに、ハルちゃんの乳母（彼は、その時、十歳だったのに、赤ん坊の時からいる乳母が、まだ雇われていた）が、私を乱暴者視して、私がハルちゃんに相撲なぞいどむと、すぐ、分けて入った。そして、

「坊ちゃん、顔をひっかかれないように、手で抑えていらっしやい」

と、いった。私は、それが、癪でならなかったが、乳母は憎らしくても、ハルちゃんに反感は持たなかった。

とにかく、私にとって、横浜から、叔母の家へ遊びに行くのは、大変な魅力だった。汽車に乗って、東京へ行くというだけでも、うれしいのである。そして、新橋駅へ着いて、日本橋の叔母の家へ行くには、鉄道馬車という乗り物を利用するのが、常だったが、これが、とてつもなく、好奇心をそそった。車体は、電車に似て、それよりずっと小型だが、レールの上を走るといふ点で、人力車とは、まるで、乗り心地がちがうのである。そんな小さな車体でも、座席は、上等と並等に分れていて、上等の方は前方である

から、二頭の馬を御者が走らせる様子が、よく見えた。本石町あたりの大きな停車場へくると、豆腐屋の余り水だという濁った水を、馬に飲ませた。また、走ってる間に、馬の尻の様子がおかしくなったと思うと、立った尾の下から、馬糞を吐き出すのが、アリアリと見えた。当時の東京の目抜き通りは、恐らく、馬糞だらけだったろう。鉄道馬車は、銀座、日本橋、浅草、上野の大通りを走ってたのである。当時、これ以上の速い乗り物はなく、また、全国で鉄道馬車のあるのは、東京だけだった。しかし、私がよく乗ったのは、もう末期の頃で、間もなく、東京市営の電車が、同じコースを走るようになった。（私が、冒頭に、『その時』と書いたのは、明治三十五年の夏のことであって、東京市電の走り出したのは、翌年の七月であると、「明治事物起原」に出ている）

そういうことは、調べればすぐわかるが、どうしても、未だに腑に落ちないのは、なぜ、私が、その時に、叔母の家に遊びに行ってたか、ということである。また、その日は、七月の五日であることが、明らかであって、小学四年生だった私は、まだ暑中休暇前で、授業があつたはずである。それなのに、なぜ、私は学校を休んでまで、東京の叔母の家へ遊びに行っていたのか。勿論、私一人で、東京へ出かけられる年齢ではなく、誰かが連れて行ってくれたの

にちがいないが、私の家で、よく、許してくれたと思うのである。

というのは、その頃、私の父は、死の床に就いていた。脳神経の病気で、最初、視力が悪くなり、やがて、中気患者のように、四肢の自由を失い、ずっと、寝ていた。何か、西洋に多く、日本人に珍しい病気であると、母が、医者を受け売りをしていた。とにかく、恢復の見込みはない病気で、もう一年も寝たきりなので、褥創（とどく）ができ、リゾールとコロジウムとかいう薬を、毎日塗るので、その臭いが、いつも、部屋にたちこめていた。

その臭いを、私は嫌悪しなかった。むしろ、父の臭いのような気がしていた。私は、父が好きであった。私を、可愛がってくれたからである。それも、手放しの可愛いがり方であって、親類の間の笑い草になつてということだった。そんな父が、病気になつたことは、悲しさの形で感じる年齢ではなかったが、不安の感情はあつた。不安は、子供の本能が味わうのだろう。

私が父の病気を知つたのは、明治三十四年の二月である。なぜ、そんなことを、正確にいえるかというと、その時に、福沢諭吉が死んだことが、明らかだからである。

父は、福沢の同郷人であり、また、その門下生だった。それで、福沢の葬式の時には、もうすでに体の不調が始ま

っていたのを、押して出席したのである。もっとも、単独ではなく、親友の吉井という人が、介添えについていた。私は、まだ、数え年九つであつたのに、アリアリと、その日の父の紋服姿が、眼に残つてゐる。その日が、寒い、雪催ゆきもよほいの曇天だつたことも、覚えてゐる。

父は、葬儀の帰途、横浜へ帰るために、品川駅から、汽車に乗りうとしらしい。ところが、もう、冬の日の暮れ方で、品川駅の灯火が輝き出したのに、それが、よく見えないことを、吉井という人に訴へたらしい。

父の視力の衰へは、その時から、格段となつたのだらう。父が家へ歸つてきて、吉井という人が、品川駅のことを、母に報告したにちがいない。夜食の膳についた父に向つて、

「あなた、これが、見えますか」

と、母が赤ブドー酒を充たしたグラスを、ランプの灯に、透かして見せたことを、私は覚えてゐる。

その頃は、わが家の灯火は、石油ランプだつた。居留地にあつた店の方では、ガス灯をつけていたが、一般の家庭は、どこも、石油ランプだつた。長い台がついて、ホヤが二重になつたのを、座敷用につかつていたが、その光りの側に、母は、グラスを持つてゐた。父の視力が弱つてから、見易いようにと、日本酒をやめて、赤ブドー酒に替へたら

しい。父は、酒飲みというほどの酒量ではなかつたが、晩酌はやつてゐたらしい。その上、摂生家だつたから、薬酒とされてゐたブドー酒に切り替へることに、不服はなかつたのだらう。

石油ランプの光りは暗く、また、その場の空気も、ひどく、暗澹としてゐた。なぜなら、ブドー酒の赤い色が、ついに、父に識別できなかつたのである。

父が福沢諭吉の葬式に列したことを、母は、後々まで、グチをこぼした。

「あの時、出かけさえしなければ、お父つあんの病氣も、あんなに悪くなれアしなかつたんだよ……」

しかし、そんなこともあるまい。福沢の葬式に、出なかつたとしても、遅かれ早かれ、父の病氣は、悪化の一途をたどつたらう。根の深いところで、蝕ばんでゐた病氣らしいからである。

その時分から、父は、病床につくことになつたと思うのだが、それまでは、時には、居留地（今の山下町界隈）にあつた店に、出勤してゐた。距離からいっても、昔の横浜の西の果てから東の果てにあつて、人力車を用いて、通つてゐたようだったが、健康が衰えてから、特別の人力車が必要だつた。それは、普通の人力車の座席の前側に、赤いビロードのついた鉄のワクをとりつけたもので、車の梶棒

をおろした時に、父の体が転び落ちないための用心だった。だから、父は、単に視力の衰えばかりでなく、その時分から、もう運動神経の方も、犯されていたのだろう。

私の家は、特製人力車を買うことはできても、常雇いの車夫を置くほど、富んではいなかったのだろう。その車を輓ぎにくるのは、野毛坂下の岩田屋という、私の家と同姓の車屋の車夫だった。父は巨体であったので、野毛坂を登る時には、車の後押しを要した。それを煩わしがって、健康の時は、坂の下で、車の乗り降りをしてたようだが、発病してからは、それができなくなり、わが家から乗って出るようになった。

ある日、威勢のいい、若い車夫が輓ぎにきて、私も一緒に乗せてくれた。恐らく、小学校の早退けの日で、父のおそい出勤の時間に、間に合ったのだらう。私は、家の車に、父と同乗することができて、大得意だったと思うが、店へ着くと、以前とちがった父の様子に、驚かされた。

父の店は、絹製品の海外輸出や、外人を顧客とするシルク・ストア（絹物小売店）をやっていたから、商品を陳列する部分と、事務をとる部分と、分れていたが、事務室の方は暗く、殺風景だった。そこに、大きな石炭ストーブがあり、父専用のひじかけイスが、側に置いてあったが、健康な時の父は、陳列場の方を歩き廻り、減多に事務室には

来なかった。

ところが、その日の父は、ストーブの側のイスに、腰かけたきりだった。そして、洋服をやめて、和服に袴をはいて（武士出身の父は、商人のくせに、そんな服装を好んだのだろう）、ステッキを脚の間に立て、それに凭たれるようにして、眼を閉じ、いつまでも、いつまでも、口をきかなかった。周囲の店の人たちも、そういう父を怖れるように、黙っていた。父は、一体、口数の少ない人で、沈黙院というアダ名をつけられるほどだったが、その時の様子は、まるで、平常とちがっていた。心の中で、病氣と闘ってるのか、それとも、もう、力尽き果てて、茫然としているのか、とにかく、とても、暗い印象だった。子供心にも、私は、父の変り方を知った。

しかし、それで孝心を起すほど、私は、感心な子供ではなかった。その日の帰途に、車の上で、私は、衰えた父につけ込んで、空気銃をネダったのである。父は私に甘く、ネダリゴトは、大てい肯いてくれるのだが、それにしても、多少の抵抗は示すのに、その日は、実に他愛がなかった。

「ああ、いいよ」

本町通りの横に、金丸銃砲店という店があった。そこへ車をとめて、私の好むままに、一挺の空気銃を買ってくれた。その時、父は、代金を払わなかったと思う。横浜

で、父の顔は広がったから、買物物は後勘定の習慣だった。

私は、大喜びで家に帰ったのだが、空気銃を見て、母が、非常に怒った。第一に、高価な買物だというのである。そして、弟には何も買わないで、私にばかり買ってやったということ、怒るのである。私を叱るよりも、父を叱るのである。

その見舞は、ずいぶん、強かった。それなのに、父は、一言の弁解もせず、母のいうに任せてるのである。どちらかというと、父は氣むずかしく、妻の尻に敷かれるという方の人ではなかったのに、その日は、全然、無抵抗なのである。よほど、氣力も、体力も、衰えていたのだろう。

私は、母が憎く、父が可哀そうになった。また、父の衰弱につけ込んで、そんなものを買わした、氣の咎めもあった。

「こんな空気銃、いらぬいよ」

私は、母のところへ持っていった。

「いらぬきや、お返し」

空気銃は、とりあげられてしまった。

無論、後になって、空気銃は、私の手に返ったけれど、何か、ケチのついた空気銃になってしまった。射撃しても、ちっとも当たらないし、そのうち、バネをかけ損なって、左

手の親指を、深く切った。ずいぶん血が出て、痛かった。そして、癒着するまでに、長い時間がかかった。

しかし、その空気銃は、父の生涯の最後の贈物として、私の記憶に残ってる。その時から六十年以上経ち、私が古稀を過ぎた今日でも、その空気銃の型や、銀色の鍍鉄の手触りや、重さまで、思い出すことができるのである。

その日から、父が福沢諭吉の葬式に出るまでに、長い距離はなかったと思われるが——或いは、どっちが先か、今となつては、見当もつきかねるが、やがて、いつ見ても、病床に寝てる人になってしまった。

病床の掛け布団は、黄八丈のようなものであったが、黄色い色が、眼に残ってる。巨体であるから、布団も、ずいぶん大きかった。そして、布団から、仰向きの顔だけ出して、まるで、仏の臥像のように、いつも、同じ姿勢だった。視力は、まったく、失われていたのだろう。その上、四肢の自由まで奪われて、それで、身動きをしなかったのだろう。また、父は、何も、ものをいわず、いつも、眼を閉じていた。それは、眼が見えないから、瞼を閉じるのか、昏睡なのか——子供の私には、父が廃人になったということとは信じられず、わざと、眠ったフリをしてるのではないかと、考えられた。私は、父に対して、その試験をしたことが、何度かあった。もっとも、側に誰かいては、恥ずかし

くて、やらなかったが、父と二人きりの時を見計らって、

「お父つぁん……」

と、呼ぶのである。

微かに返事をしてくれたことが、一、二度あったので、その後も、数回、試みたのだが、しまいには、無反応だった。それでも、父の病気が進んだのだとは、考えられず、面倒くさいから、返事をしないのだと、思っていた。子供は、親の生命が絶望だというような思考が、決して、できないものなのである。

それは別として、私自身が中年を過ぎてから、人と対座してゐる時に、眼をつぶる癖が出てきた。何か、眩しいような、眼を開けてゐるのが面倒のような気持で、そうなるのだが、自分では、気がつかず、人にいわれて、その癖を確認するようになった。私には、それが、父の遺伝のような気がしてならないのである。父は、発病してから、いつも、眼を閉じていた。しかし、健康な時でも、カッと、眼を見開くような人ではなかったのではないか。やはり、何か、眩しいような、そして、眼を開けてゐるのが面倒のような気持が、あったのではないか。病気になったら、一層、眼をつぶる方が、気楽になったのではないか。実際、人間というものは、生きてゐる限り、眩しいような、眼を開けてゐるのが面倒のようなことが、ずいぶん多いではないか――

私が、日本橋の叔母の家へ行った時には、父は、コンコンと、眠り続ける容態だったにちがいない。

といって、それは、危篤というわけではなく、もしそうだったら、母が私を手放して、東京へ遊びにやる筈はない。恐らく、父は、数カ月間も、同じような容態を続けていたので、急変ということは、誰の頭にも、浮ばなかったろう。それにしても、私が一人きりで、東京へ遊びに行くわけもないので、誰が私を連れてったか、ということになるが、それは、多分、叔母の良人の安藤医師ではないか。

安藤医師は、商売柄、よく横浜の家へ、見舞いがてら、父の診察にきてくれたが、たまたま、その時も、父の容態を見て、この分なら、まだ大丈夫と思つて、私を同行したのではないか。彼は、長男のハルちゃんを可愛がつていたし、それと仲のいい私を、連れて帰る気になったのもあるう。或いは、私の方から、セガんだのかも知れない。ただ、なぜ、暑中休暇前のその日に、私が、学校を休んで、東京へ行つたかは、疑問として残るが、翌日が、日曜でもあったのだろうか。こんなことは、読者には、どうでもいいことだが、遠い過去から、少しでも真実を掘り返そうとする私には、かなり重要なのである。

とにかく、私は、叔母の家で、愉しい一夜を過した。愉

しいというのは、仲よしのハルちゃんと、なにやかと、遊ぶことが、すべてだったろう。そして、夜も、ハルちゃんと、床を列^なべて、寝たにちがいない。

翌日——つまり、七月五日だが、私は、朝飯が済むと、もう、胸をはずませていた。昨夜のうちから、今日は、ハルちゃんと一緒に、どこかへ遊びに連れて行かれる約束に、なっていたからである。

どこかといっても、行く先は、大てい、きまっていた。

最上の場所は、浅草で、まだ、映画街はなかったが、玉粟りと、十二階と、花屋敷があった。十二階は凌雲閣ともいい、煉瓦建ての細長い塔で、狭い階段を登って、十二階目のところで、地上を展望するだけのものだが、東京で一番高い建物に登ったという満足感を与えてくれた。そして、各階ごとに、東京の有名な芸妓の写真が、飾ってあった。関東大震災で、倒壊するまでは、今の東京タワーに匹敵する、東京の名所だった。

花屋敷の方は、多くの猛獣を飼っている上に、アヤツリ人形芝居とか、奇術とかいうアトラクションがあって、当時の子供には、上野の動物園より、ずっと、人気があった。場所も、十二階のすぐ下で、六区の外れだが、その附近が、私たちには、一番、魅力があった。

浅草まで出かける時間がない時でも、両国の広小路なら、

叔母の家から、歩いて行けた。広小路は、浅草ほど、魅力はなかったけれど、その古い絵草紙屋へ寄るのは、また、別な愉しみだった。その頃は、まだ、木版の錦絵が刊行されてたらしく、絵草紙屋の軒先に、日清戦争や北清事変の新武者絵や、昔ながらの加藤清正の虎退治というような絵が、一面に、かかっていた。そして、日本紙と木版絵具の独特の匂いが、強く、鼻を打った。そのような店は、横浜にはなかった。

その上、その絵草紙屋は、書店も兼ねていた。私たちは、錦絵を見飽きると、下に列んだ書籍のうちから、巖谷小波^{いわや さざなみ}の世界お伽話や、日本お伽話をとりあげ、まだ読んでないのを、買うのが、とても、うれしかった。錦絵の戦争画の手法は、子供心にも、幼稚に感じるのか、活字本のお伽話の方に、ずっと、心をひかれた。

その日も、私は、浅草か、両国広小路か、どちらかへ、遊びにいけるものと、期待していた。いつも、ハルちゃんの乳母が、私たちを連れてってくれるのだが、もう一晚、叔母の家へ泊ることになってたから、時間はたっぷりあり、多分、浅草行きになるだろうと、愉しんでいた。

ところが、乳母に何か用でもできたのか、十時を過ぎても、出かける様子がなかった。そのうちに、午飯になった。ご飯を食べたら、連れて行ってくれるのかと、思っていると、

その頃から、叔母の家の人々の私に対する態度が、変ってきた。

「あのね、遊びに行くのは、この次ぎに致しましょうよ」

と、ハルちゃんの乳母が、何かいい悪くそうに、切り出すのである。

そればかりではない。叔母自身も、

「Tちゃん（私の名）、今日は、横浜へ帰ろうよ。叔母さんも一緒に、送ってあげてから……」

と、ひどく、優しい調子で——まるで、私の頭でも撫ぜるような工合に、いい出したのである。

「だって、もう一晚、泊って約束だったのに……」

「そうよ。でも、叔母さんも叔父さんも、急に、横浜へ行くご用ができたの。明日だと、都合が悪くて、あんたを送っていけないのよ。だから、今日、帰りましょうよ。また今度、遊びに来て、ゆっくり、泊ってけいいわ……」

叔母は、その頃、何歳だったろうか。恐らく、三十そこその女盛りだったろうが、親類切つての美人で、タシナミのいい人だったが、どこか、冷たさがあつた。私に對しても、ずいぶん叱言をいっただころが、その時は、イヤに優しく、イヤに温かく——何か、態度が、不自然なのである。

そういうことに對して、子供は、ひどく敏感で、大人の

ウソを、すぐ、見破るのだが、ウソの動機を推理する力は、全然、欠けていた。私は、ただ、不満だった。そして、その共感を、ハルちゃんに求めた。

その時分の少年が持っていた遊び道具に、コンニャク版というものがあつた。濃いゼラチンを張った上に、紫インクで書いた厚紙を宛て、それを剥がして、白紙で刷ると、十枚ぐらいいは、ハッキリと、字や絵が、現われるのである。その幼稚な印刷道具を、ハルちゃんが持っていた。

私は、彼と相談して、今夜泊らずに、横浜へ帰るのは、どうしてもイヤだ——という意味の文句を、印刷した。今の子供なら、ゼツタイ反対という字を、使うだろう。

それを、私とハルちゃんは、

「号外、号外！」

と、叫びながら、家の中に、撒いて歩いた。

そのうちに、ハルちゃんが、叔母に呼ばれた。そして、私のところへ帰ってきた時には、彼の態度が、ガラリと変つていた。

「Tちゃん、今日は、うちへお帰りよ。また、お出でよ」

私は、ひどく、打撃を受けた。ハルちゃんまで、大人側についたという感じで、孤独になり、また、無力になった。号外遊びなぞして、騒いでたのは、午後三時頃だったろうか。叔母は、私を宥め、すかして、横浜へ連れ帰るとい

いながらも、すぐ出発する様子ではなかった。恐らく、同行すべき彼女の良人が、往診中でもあつて、その帰りを、待っていたのではなからうか。

私は、気が挫けて、横浜へ帰ることを、納得したが、その条件として、ハルちゃんを同伴することを、持ち出した。

「それは、ダメなの。今日は、ダメなの」
叔母の拒否は、強かった。

私は、一切が、つまらなくなつた。しかし、大人たちの言動の裏に、何かがあることは、感じていた。といつても、その日の昼ごろに、横浜の家から、私を連れ帰るように、電話がかかつてきたことなどは、無論、推察できなかった。大人たちは、私を心配させまいとして、そのことを秘したのだから、真相を打ち明けられれば、私は号外遊びなぞせず、素直に、横浜へ帰つたらう。

やがて、叔母の良人も帰つてきて、二人に連れられて、私は、新橋駅（その頃の東海道線終点）から、汽車に乗つたのであるが、その辺の記憶は、まったく薄れている。ただ、汽車の中で、日が暮れたことと、叔母や叔父が、ひどく優しく私を扱ってくれたことが、妙に寂しくて、泣きたいような気持になつたことを、よく、覚えてゐる。

その頃の客車の車体は、大変小さなもので、夜になると、天井から、嵌め込みの石油ランプが、照らした。そのラン

プに点火されたのは、恐らく、大森駅か、川崎駅だろう。（蒲田駅は、まだなかった）停車中に、客車の屋根を歩く、駅夫の靴音が、ゴトゴト聞えて、厳丈な、ガラスの円筒の中に、灯のついたランプが、挿し込まれるのである。その操作は、子供にとって、もの珍しいから、私は、きつと、熱心に眺めたらう。でも、鶴見を過ぎる頃から、私は、叔母の膝枕をして、眠ってしまった。その頃の鶴見附近は、まったく田と畑ばかりで、夜は、農家の灯も疎らで、車窓は、黒い幕を張つたように、何も見えなかった。それが、とても、寂しかった。その上、鶴見川という河に、私は、恐怖心を持つていた。母の方の親類で、コーちゃんという男の子が、鶴見に里子にやられてる間に、あの河で、溺死したのである。母は、汽車に乗った時に、鶴見川の鉄橋を渡ると、きつと、そのことを、口にした。私は、鶴見川が、魔物の棲む河のようで、怖くてならなかった。その夜も、怖さのために、眼を閉じてるうちに、眠りに入ったのだろう。大人は、恐怖によって、眼が冴えるが、子供には、反対の作用が起るらしい。

「あの時ね、お前さんの寝顔を見て、ほんとに、涙が出てきたよ。何も知らずに、寝てると思ってね……」

叔母が、その後、よく、その時のことを、私に話したから、それで、私は、車中で眠つたことを、覚えてるのか

も知れない。

横浜駅（今の桜木町駅）へ着くまで、眠り続けたらしいが、やがて、夜の街を、人力車で走ったことは、ハッキリと、記憶してる。きつと、叔母か叔父か、どちらかの車に、同乗させられたのだろう。

坂を登って、わが家が近くなると、私の気持は、軽くなつた。叔母の家で、帰宅をいやがった気持は、もう、消えていた。東京のお客さまと一緒に、家へ帰るのだから、いろいろの愉しみが、想像された。

車を降りると、私は、まっ先に、わが家の玄関に駆け込んだが、平常と、まったく様子が異なるのに、気がついた。家の中に、沢山、ランプが灯されて、玄関まで明るいし、何か、人がガヤガヤしてる様子で、私を出迎えたのも、あまり、顔馴染みのない男たちだった。

やがて、奥から、弟の彦二郎が、出てきた。私より二つ下の弟で、八つだが、きつと、混雑の中で、誰にも、対手（たてあひ）にされなかったのだろう。

彼は、私を見ると、むしろ、誇らしげな、快活な調子で、報告した。

「お父つアんが、死んじやったよ……」

私が帰宅した時には、父は、まだ棺に入れられず、病床に臥たままになっていた。

私の姿を見て、母が泣き、遺骸の顔の白布をとって、押ませるとか、線香をあげるとか、いろいろのことがあったのだろうが、少しも、記憶してない。

日本橋の叔母も、私を早く連れ帰らなかったために、父の死に目に会わせなかったことを、きつと、自分の責任のように私の母にかきくどいたにちがいないが、その場の子も、私の頭に残ってない。

とにかく、父は、その日の朝まで、容態に変わりがなく、午後から、呼吸や脈がおかしくなつて、医者がきて、急を告げたので、日本橋の叔母のところへ、電話をかけたのだろう。もし、叔父が外出してないで、すぐ、出発することができたなら、私も、父の最期に間に合ったかも知れない。父が息をひきとったのは、ちょうど、私が鶴見あたりの車中で、眠ってしまった時刻らしいのである。

しかし、間に合ったにしろ、どうということはない。父は、危篤にならない前から、意識を失つた病人であるし、また、数え年十歳の私が、父の生命の途絶える瀬戸際に直面したって、どういう態度も、言葉も、表わしようになかったらう。

二つ年下の弟の彦二郎が、人間の死ということを、まっ